糸を紡ぐ

高松中央高等学校　山下　真衣

心は糸のようなものだと思った。趣味の裁縫をしているときに、手元の糸を見てふと思った。糸の始まりと終わりは必ず一つしかなくて、他の糸と繋がることができる。複雑に絡み合ってしまうこともあり、これがなかなか厄介だ。糸というものは毎日さまざまな感情を抱き、変化していき、時にはややこしく絡まってしまう自分の心に似ていると思ったのである。

心の糸が始まるのはこの世界に生まれ、なにかしらの感情が芽生えたときだと思う。この世界に生まれて、初めて抱く感情はなんなのだろう。私は覚えていないけれど、「うれしい」だといいなと思う。赤ちゃんは産まれてくるときは泣いているけれど、きっとそれは家族に会えたことを喜んでいるうれし涙で、「かなしい」涙ではない。なにより、よい方の感情で始まる糸の方が素敵だ。
では心の糸の始まりが生まれてきたときならば、心の糸の終わりは死ぬときだろうか。ある日突然ぷつん、と切れてしまうのか。それはなんだか怖い。できればそっとほどけていくように切れて欲しい。切れてしまった糸で、蝶々結びでもつくって誰か大切な人の心に結んでおきたい。

心の糸を繋げていく。人と関係を築いていくことの例えだ。私は、積極的に人と関わりにいくタイプではないが、人間関係を築いていくことを苦に思ったことはない。むしろ好きな方だ。そんな私が、人と心の糸を繋ぎ、結んでいく上で特に大切にしているポイントがある。結び方だ。片結び、もやい結びにはた結び、糸には様々な結び方がある。家族や友だちなどの身近な人とは、切れない様に固結び。あまり長くは関わりたくない人（要するに苦手なタイプの人）とは、引き解け結び。
人によって態度を変えているように思われるかもしれないが、これはどちらかというと向き合い方を変えているのだ。苦手な人とまで真剣に向き合っていると疲れてしまう。張り詰めた糸は切れやすい。少し緩いぐらいが毎日を乗り越えていく上で、ちょうどいい。

一番大変なのは、糸が絡んでしまうときだ。悩んでいるときが、糸が絡んでいる状態に似ている。なかなか、解けなくて苦しい。家庭科の授業で使う、縫い糸を思い浮かべてみて欲しい。私は小学生の頃、家庭科が大の苦手でよく放課後まで残って作品を作っていた。一刻も早く帰りたい。手元が自然と早くなる。そして、縫い糸が絡まってしまう。一度絡まりだすと焦る。落ち着いてほどけばまだなんとかなるものを、早く帰りたいという気持ちが勝り、訳がわからない状態にもっていってしまう。これが布を縫っているときに起こるともっと悲惨だ。一度糸を切って、また最初から縫い直さなければいけない。帰る時間がどんどん遅くなる。私の裁縫への苦手意識が増した原因のひとつだ。悩みというものも似たようなもの

で、考えれば考えるほどややこしくなっていく。どんどん苦しくなっていく。最近は裁縫での経験を踏まえて、こういうときはとりあえず一旦放っておくのも一つの手だと思うようになった。しばらくしてみたら、案外簡単に解けたりする。勝手に解けていて、そもそも悩んでいたことすら忘れてしまうことだってある。こう思えるようになるまでの道のりが長く、今だってそう上手くいくわけがないと思っている節もあるが、緊急性が高い場合を除いては一旦置いておくという心持ちは大切なことだ。

現在は、手芸が得意な友達との特訓の成果もあり裁縫は割と好きな方になった。たくさんの人と心の糸を繋いでおくと、こういういいことがある。色々な人が、私の知らなかったこと、物事の見方、多くのことを教えてくれる。自分の世界を広げ、新しい景色に出会うことができる。現に私は、裁縫の楽しさを知った。これからも、多くの人と心の糸を繋げていきたい。そして自分の、自分だけの最高の一本を紡いでいく。